

せめぎ合う霊力：ケニア海岸地方ドゥルマにおける キリスト教徒達の語り

岡本，圭史

<https://hdl.handle.net/2324/1806793>

出版情報：九州大学，2016，博士（人間環境学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 岡本圭史

論文題名 : せめぎ合う霊力——ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教徒達の語り

区 分 : 甲

博士論文の要約

本研究の目的は、ケニア海岸地方に住むドゥルマ (Duruma) の人々についての民族誌的記述を通じて、キリスト教への改宗過程を捉えるための、より適切な視座を開拓することである。ドゥルマの間では、妖術 (utsai) を用いて身近な人々を攻撃する妖術使い (mutsai, pl. atsai) が、村の中に住んでいるとされる[浜本 2014]。妖術使いに加えて、様々な種類の憑依霊もまた、彼等を攻撃するとドゥルマは語る。憑依霊はペポ (pepo) あるいはニヤマ (nyama)、シェタニ (shetani) と総称され、更に様々な種類の霊がその中に含まれる[浜本 2004]。こうしたいわば霊的な脅威への対処が、ドゥルマにとっては重要な課題となる。妖術や憑依霊に対処する最も一般的な方法が、専門の施術師 (muganga, pl. aganga) による各種の施術 (uganga) である。他方、近年のドゥルマの間では、施術の代替案としてのキリスト教もまた人気を集めている[浜本 2014]。本研究においては、妖術や憑依霊をめぐるキリスト教徒達の語りを主な資料として、キリスト教徒となる過程が、ドゥルマ自身にとってどのような意味を持つかという点を明らかにする。更に、キリスト教への改宗過程を捉えるための方法上の問題についても検討を加える。

ドゥルマは、主にケニア海岸地方に住む農耕民である。主な現金収入の機会は、若い男性による、海岸部にある都市モンバサにおける出稼ぎである。その生活の基本的な単位となるのが屋敷 (mudzi, pl. midzi) であり、屋敷は、典型的にはその主となる男性とその妻、子供達からなる[浜本 2001]。ケニア海岸部の都市モンバサの西方、後背地のキナンゴ (Kinango) という街の近郊に位置する G 村が、筆者が調査を行った主な場所である。G 村にあるドゥルマ家庭の 1 つに滞在し、近隣に住むキリスト教徒達の語りを収集した。調査期間は 2012 年 10 月から 2013 年 2 月、同年 11 月から 2014 年 2 月、2016 年 1 月から 3 月である。

序論においては、アフリカ妖術研究と人類学的改宗研究の交差する点に、本研究の課題を位置付けた。妖術研究の今日の課題は、妖術とキリスト教の接点のより詳細な把握である。他方、改宗研究においては、既成の改宗概念によって対象を歪曲することのない、キリスト教徒となる経験の当事者の視点に沿った理解が課題となる。これらの 2 つの課題に取り組む際には、妖術や憑依霊の語りを伝統宗教としてキリスト教と対置してはならない。加えて、改宗を宗教の受容と同一視してもならない。上記の諸点を考慮し、キリスト教徒となる過程の当事者にとっての意味の解明並びに改宗過程を捉えるための視座の精緻化という、本研究の課題を提示した。

第 1 章及び第 2 章においては、ドゥルマにとっての身近な脅威としての妖術の姿を素描した。第 1 章において、妖術がドゥルマの直面する様々な問題と結びつく様子を示した。それに加えて、その妖術への最も一般的な対処法としての施術師による施術や、憑依霊の観念についても簡潔に述べた。妖術使いの用いる妖術が、様々な病気や事故、事業の失敗や畑の不作、家畜の死に加えて、過

度の飲酒や離職にまで至る、様々な問題を引き起こすとされる。妖術を示す一般的な語彙はウツァイであるが、特定の問題を引き起こす個別の妖術もまた知られており、それらはしばしば固有の名称を持つ。こうした多様な妖術への対処法として、主に施術師によってなされる様々な施術がある。施術という方法を用いて、人々は妖術や憑依霊といった霊的脅威に立ち向かう。第1章においては、こうした霊的脅威との対立の図式が、ドゥルマの日常生活の中で大きな位置を占めているという点を指摘した。第2章においては、妖術がドゥルマにとって身近な脅威であるという点を、隣人の中に潜むとされる妖術使いを人々が警戒する様子の描写を通じて示した。ドゥルマが妖術使いの疑いをかける相手は、往々にして隣人である。妖術使いの疑いをかける相手とも、多くの場合に、ドゥルマは友好的な関係が続ける[浜本 2014 : 1]。その一方で、妖術の語りのかかなりの部分が、村の中の出来事や身近な人々との間の関係の中からその素材を得ており、そこでは、しばしば隣人達への警戒が主題となる。冒頭の2つの章において示したのは、霊的脅威としての妖術と憑依霊の、ドゥルマの日常生活の中の位置である。

第3章においては、改宗過程を扱う際に考慮すべき方法上の問題について検討した。人類学的改宗研究は、儀礼的实践や霊的存在にまつわる観念群を伝統宗教として一括し、外来のキリスト教と対置してきた[e.g. Kammerer 1990 ; Meyer 1999]。他方、妖術研究の知見は、妖術を宗教現象としてキリスト教と対置すべきではないことを示している。これらの2点の考慮が示す通り、妖術を宗教現象としてキリスト教と対置することなく、当事者にとっての実在する脅威として描き出す必要がある。更に、アフリカ諸地域の妖術やキリスト教をめぐる近年の研究は、キリスト教徒となるという選択が妖術への新たな対処法の導入としての側面を持つことを明らかにしている[e.g. Ashforth 2005 ; Newell 2007]。それ故に、改宗を宗教的信念の受容と直ちに結びつけることにも問題がある。これらの点の検討を通じて、ドゥルマにおけるキリスト教徒となる過程をめぐる議論の依拠する視座を、第3章において提示した。

第4章においては、ドゥルマにおけるキリスト教徒となる過程の諸相を素描した。アフリカの妖術やペンテコステ派を対象とする諸研究は、キリスト教を妖術への対処法として位置付ける傾向にあった[e.g. Newell 2007]。他方、主に北米の新宗教運動を扱う社会学的研究においては、教団への加入者における宗教的信念の受容や自己変容に焦点が合わせられてきた[e.g. Gooren 2010]。どちらの立場を採った場合にも、非信徒が信徒となる過程の理解は一面的なままに留まる。既成の改宗概念による対象の歪曲を避ける方法の1つは、キリスト教徒となる過程を示す民俗語彙に注目することである。「救済された者」を意味するモコフ (mwokofu) というドゥルマ語は、キリスト教徒となった人物を指す[浜本 2014]。また、「救われる」と訳し得るクオコカ (ku-okoka) という語が、「キリスト教徒になる」という意味を持つ。ドゥルマにとって、キリスト教徒になるという選択は、祈りという妖術への新たな対抗策の導入としての側面を持つ。他方、良き信徒であろうとする熱意を表明する信徒達の語りが見せる通り、「救済された者」となることを、当事者における宗教的信念の受容や自己変容と完全に切り離すことにも問題がある。第4章においては、信徒達の語りを基に、ドゥルマにおける「救済された者」となることが、妖術への新たな対抗策の導入、宗教的信念の受容、霊的脅威との対立図式の変容という3つの側面を持つことを示した。

第5章及び第6章において、ドゥルマにとってのキリスト教徒となる過程の第三の側面に焦点を合わせた。キリスト教は、妖術や憑依霊をめぐる語りに新たな次元を付け加える。その結果、信徒達は霊的脅威との対立図式の変容を経験する。こうした状況を描き出すために、第5章においては、キリスト教と妖術観念の間の相互作用に焦点を合わせた。今日のドゥルマの間では、悪魔崇拝者 (devil worshippers) と呼ばれる人々への関心が高まっている。悪魔崇拝者は、妖術使いの異型としての側面を持つ一方で、キリスト教徒の中に潜んで教会の活動を妨害する存在としても語られる。

悪魔崇拝者にこうした2種類の性質が付与されている結果として、キリスト教は妖術使いに似た敵をその内部に抱え込むこととなる。ここに、霊的脅威との対立図式がキリスト教によってかえって複雑なものとなった様子を見て取ることができる。更に、妖術や悪魔崇拝をめぐる諸観念はまた、個別の出来事に対する人々の推論を通じてそれ自体を複製すると共に、妖術使いと疑われる人々への実際の攻撃を生み出す可能性をも秘めている。また、第5章においては、キリスト教と分かち難く結びつく妖術や悪魔崇拝者をめぐる観念が、実在する敵としての妖術使いの殺害を正当化する論理を補強する経緯についても検討した。

第6章においては、本章においては、キリスト教が憑依霊観念に及ぼした影響に焦点を合わせた。キリスト教徒達と非信徒達の間では、憑依霊をめぐる語り口に大きな差異が見られる。キリスト教徒ではないドゥルマは、様々な問題を引き起こし得るものの、共存し得た場合には利益をももたらし得る存在として憑依霊を捉える。他方、キリスト教徒達は、憑依霊が専ら問題を引き起こすという点を強調すると共に、憑依霊が教会の活動を阻害する神の敵であるとする。こうした語り口の差異が示しているのは、憑依霊を明確に敵としてのみ位置付けることによって、キリスト教が霊的脅威との対立図式を、より一面的なものとしているという点である。

第7章においては、外国人の像と結びついたキリスト教が占める、対立図式の中の位置について検討した。当事者にとっての正常な出来事と異常な出来事の境界に妖術や憑依霊を位置付けた時、外国人達もまたその境界領域上の存在となり得る。ドゥルマにとっての正常と異常の境界に外国人という像が位置すると共に、この外国人像とキリスト教が密接に結びつき、この境界領域に共に侵入するという点を指摘した。それに加えて、その起源が西欧であるが故に、キリスト教はその悪魔崇拝者との関係を人々に想起させる点をも、第7章において指摘した。こうした疑惑と不可分である結果として、外国人のみならずキリスト教もまた、潜在的な霊的脅威となる。ここでもまた、キリスト教は霊的脅威とドゥルマの人々との間の対立図式に新たな要素を付け加えている。

結論においては、個別の事例の検討を終えた地点から、「救済された者」となることの第三の側面、すなわち霊的脅威との対立図式の変容にについてもう一度検討を加えた。悪魔崇拝者や妖術使い、更には憑依霊をめぐるキリスト教徒の語りを非信徒の語りと比較することから明らかになるのは、霊的脅威から信徒達を開放するはずであったキリスト教が、神の敵と闘い続けるという新たな図式へと、彼等を導き入れているという点である。最後に、本研究を通じて、改宗過程を捉えるためのより歪みの少ない視座が切り開かれたことを確認した。

参考文献

Ashforth, Adam

2005 *Witchcraft, Violence, and Democracy in South Africa*. The University of Chicago Press.

Gooren, Henri

2010 *Religious Conversion and Disaffiliation: Tracing Patterns of Change in Faith Practices*. Palgrave-Macmillan.

浜本満

2001『秩序の方法——ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』弘文堂。

2004「イスラムの霊——ドゥルマ社会空間のイスラム的共進化」『東アフリカ海岸地域におけるイスラムの多様性とネットワークに関する人類学的研究』（浜本満編）一橋大学社会学研究科・社会人類学共同研究室、pp.5-27。

2014『信念の呪縛——ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会。

Kammerer, Cornelia Ann

1990 Customs and Christian Conversion among Akha Highlanders of Burma and Thailand.
American Ethnologist 17(2):277-291.

Meyer, Birgit

1999 *Translating the Devil: Religion and Modernity Among the Ewe in Ghana*. Africa World Press.

Newell, Sasha

2007 Pentecostal Witchcraft: Neoliberal Possession and Demonic Discourse in Ivoirian Pentecostal Churches. *Journal of Religion in Africa* 37:461-490.